

性別認識過程におけるジェンダーの影響

— 保育園における2歳児の保育場面の観察から —
金田利子（静岡大）・ ○清水絵美（静岡大・院）

目的：子どもは、何歳頃から文化的性差としてのジェンダーを内面に取り入れていくのだろうか。こうした点は未だ明らかにされていないように思われる。自分の「性別」を認識できるのが3歳頃である。保育園でいえば2歳児クラスの子どもたちは、4月時点では殆どの子どもが満2歳で性別の認識はまだ成立していないが、年度末の3月には殆どの子どもが3歳になり「性別」を識別するようになる。ではこのような性別を認識するプロセスにおいて、子どもの内面にジェンダーがどのように受けとめられていくのであろうか。

方法：このような問題意識のもとに、「性別」認識過程にある保育園の2歳児クラスに入り、約1年間朝の自由遊びの時間を中心に週1回弱の割合で観察した。

結果：まず、自己の「性別」の認識が多くの子どもに成立するのは、10月頃になってからであること。「性別」認識の有無にかかわらず、この年齢の子どもたちは、男児女児の別なく、ままごと遊びが好きで、よくやっている。その中に役割分業的な面はなく男児もエプロンをかけてご飯づくりに精を出す姿が多く観察された。後半の11月頃からは大部分の子どもが「性別」を認識するようになっている。このプロセスで、ジェンダーが影響する要素として次の4点が抽出された。①先生のことばかけ、②生活習慣、③行事、④絵本（文化財）である。①では、ままごとや、みたてつつものを頼むときなど男児には「お父さん」と呼掛けるなど。②では、徐々の影響が見られた。最も、顕著なのが③（七・五・三）であり、発達的にも性の識別ができはじめる頃に、女児が華やかに着飾ることに大きな影響が見られた。④その頃から絵本の主人公へのジェンダー的な同一視が見られた。